岩に碎けてどう〳〵と音をたてつゝ絶えず流れて居る、此の水が波木井川と合して富士川へと流れ込み、そしてあの名だたる急流の亦勢を增すの一分となり、流れ〳〵て終に駿河灣へと注ぐのだが思へば水の源は何れも一滴の水に外ならぬ、然し其の一滴の水が絶えず噴湧して止まず遂に流れ集まつて彼の大を到すのだ。僕は自分の學事に思ひ到つて、我々の今の勉强も一句一章一事一科と些細の歩を運んで止まぬ時、遂にそれが集り積つて人格の大成を來すのである。只水は自然に湧いて流れるが吾等は自分で心に鞭うち努めて其の大を來たさねばならぬとを今更に感じた。

川に沿ふて三四軒ある水車小屋を過ぎり、いつの間にか梅平へと出た。山手の方から薪を負ふた女が二人後から僕を追越して、さつさと行き過ぎたが、僕は思はず勞働は神聖なりと心の中で叫んだ。彼の女等の姿はやがて穢しい暗い家の裏へ隱れた、あれが彼女等の住家なのだらう。足る事を知り勞役を樂む者に取つては賤ヶ伏屋も金殿玉樓であると云ふが、彼等はそう思つて居るかどうか遠くから馬車屋のヲッバの音が響いて來たので氣が附いて四邊を見廻はすと、漸く薄暮に近づきつゝあるので急ぎ元來た道へ足を還した。

友人の喪を悼んで

中四　松澤嘶馬

嗚呼將に蕾を破り複雜なる社會に立ち大なる自我を實現し生きては一世を風靡し、死しては千歲の後までも芳名を竹帛に垂れんとする親友、君よ君はさぞ世は無情である、人生は悲哀であると日夜天地宇宙の無限なるに反して、人生の有限なるを思ひ憂愁に堪えぬらん。而し君は彼の涅槃の彼岸に到達して此の混沌たる社會を眺め深き思ひに耽るやらん。君は將に蕾を破り暗冥に充ち滿されて居る、社會人類延いては國家を救濟し人生の花を咲かせ黃金を身に纏はんとせしに如何せん、天命此處に盡きたりしか、或は惡魔の襲ひしか、君のあの偉大なる天才を發輝せず、煩悶悲哀の中遂

に黄土と化せり。語に云ふ美人變而爲二黄土一と。然り君は靈界の美人たり、假令肉体は黄土と變ずるも君の人格精神たるや悠久無限なるかし。あゝ天よ、汝如何に自然を貴ぶとは言へ何の理由あつてか我親友の他日馥郁たる清香を放つべき花の蕾を枯死せしめしか。何ぞ此の天地に長き春秋を送らしめ、我と享樂の慰籍を共にせしめざるぞ。我は汝を恨みて止まざる也。支那榮代詩中に人生自レ古誰ヵ無レ死と、然れども僅二十才に垂んとして永く歸らぬ旅路とは。『天よ天、何ぞ前途有望なる青年を見捨てし。地よ地、何の恨あつてか生花に露を與へざりし?』されど天言はず、地答へざるを如何せん、我心は暮れ行く秋の心地して紅涙頻りに頰を下りぬ、あゝ吾いかでか之を忘れ得べき。

君と我とは時に孤燈の下に書を繙きて、疑を質し、時には孤舟に掉して明月を賞翫し、或は一室に快談して茶菓を喫し、或は險峻ある山岳を登攀し、時に或は降雪の朝一窓の下に逢勃たる銀世界を賞觀し睦まじく暮せしを。遂に過去の夢幻今は煩悶悲哀の憂世と化せり。昨日の快樂は今日の憂鬱と變ず、美人變而爲黄土噫!!君にして在さば境は幽にして花即寥々香氣蓊勃たる梅溪に遊びつらむ。又紅日熾くが如き盛夏に至れば、輿に海濱に避暑して以て潮に浴せあらん。又暮れ行く憂愁の秋には互に慰めつ讀書に餘念なく理想をして現實の奥底に至るべく大奮闘せしならんに。あゝ我は無二の親友を失ひたり、無二の親友を失ひたりき月は曇るとも復再び照さん。花は散るとも再び咲き匂ふなり、然れ共君は一度逝きて長く歸らず。

思へば吾等が天命淺かりき、あはれ人生朝露の如しとは誰が言ひ初めし、わが心中にある君が面影は永久に消ゆる能はず、君と我とは刎頸の友なりき、今又回顧すれば胸塞がり、腹引き裂くばかりあり、然れ共人生如何ともなし難し、宇宙の自然に順ぜざるべからず。

我等は奮闘の如何により、王侯たるべく又奴隷たるべし。君は惟涅槃の寂莫に於て奮闘せよ我は此の活天地に奮闘せんのみ、親友君今已になし。噫君亡し矣。